



リハニュース No.57

発行：公益社団法人 日本リハビリテーション医学会 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂6丁目32番3号 Tel 03-5206-6011
Fax 03-5206-6012 ホームページ <http://www.jarm.or.jp/> 年4回1、4、7、10月の15日発行 1部100円

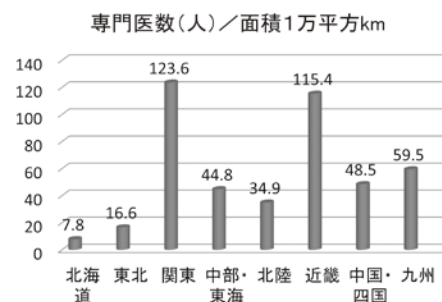
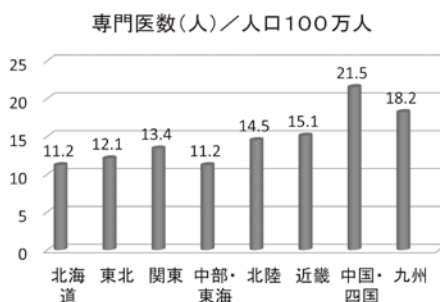
特集 地方会新たなステージへ

日本リハビリテーション医学会広報委員会 長谷川 千恵子

はじめに

日本リハビリテーション医学会会員は、全国的に密接な関係を持っていることが多く、普段は地方による隔たりをさほど感じません。そんな中、リハニュース57号では、敢えてそれぞれの地方会に焦点をあて、特集としました。

第1の理由として、リハビリテーション（以下、リハ）医学は、地域に密着した性質をもっているという点です。図では人口100万人あたりの専門医数、1万平方キロメートルあたりの専門医数を示しました。12年前東京から函館に転居した際は、患者さんがリハサービスにアクセスすることがいかに困難かを突き付けられ、愕然としました。また、T字杖の先端に付けるアイスピック（雪上の滑り止め）を初めて知りました。



専門医数：2013年2月リハ医学会データ
人口：2012年10月1日推計人口
面積：2011年国土交通省国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」

第2に、若手医師のリクルートや教育について、地方会の役割は今後ますます重要性が増してゆくと予測される点です。地域全体でリハ医を育ててゆけるのであれば、リハ医学を学びたい医師に向けて、魅力的なアピールになるのではなかろうか。

第3に、公益社団法人となったリハ医学会の外組織となった地方会は、今後さらにその特色を生かした活動を期待されていると感じます。

会員の皆様が今回のレポートを興味深く読んでいただけますと幸いです。

目次

- 特集：地方会新たなステージへ..... 1-6
 - 第50回学術集会：近況報告..... 7
 - INFORMATION：国際委員会、教育委員会、診療ガイドライン委員会、資格認定委員会、関連機器委員会、関連専門職委員会、評価・用語委員会、広報委員会、関東地方会、中部・東海地方会、近畿地方会、中国・四国地方会、九州地方会..... 7-10
 - 障害保健福祉委員会連載【3】..... 11
 - リハ医への期待(17)：義肢装具士の立場から..... 12
 - 専門医会コラム：新専門医制度について..... 13
 - 医局だより：旭川医科大学病院リハ科..... 14
 - REPORT：第4回日本ニューロリハビリテーション学会、第2回がんのリハビリテーション懇話会、第27回日本障害者スポーツ学会..... 14-15
 - お知らせ、広報委員会より..... 18
- 広告：医歯薬出版(株)、大日本住友製薬(株)、中外製薬(株)、武田薬品工業(株)、(株)協同医書出版社

リハ医学会における地方会の役割と今後の展望

地方会連絡協議会担当副理事長 出江 紳一

皆様ご承知の通り、日本リハビリテーション医学会（以下、学会）は、2012年（平成24年）度から公益社団法人となりました。それに伴い、地方会は学会組織から独立した任意団体と位置づけられました。地方会の歴史は、地域により様々であり、リハ医学の発展に尽力されてきた先人の努力と智慧の歴史でもあります。任意団体から学会下部組織となったとき、まだ専門医になって間もなかった筆者は、学会の体制が確立したという誇らしさと一体感を感じたことを記憶しています。そのため、地方会が任意団体に戻ったことに若干の寂しさも覚えますが、学会の公益社団法人化は会員と国民の利益に合致すると信じています。それでは新しい時代の地方会の役割とは何で

しょうか。

第一に、これまで以上に、地域の特性を活かし、医療・福祉・行政・市民の様々な団体と有機的に繋がって、患者さんとその家族を地域で支える仕組みを作ること、そのための情報交換・事業展開・社会への発信を行うことが大切であると考えます。

第二に、専門医育成研修プログラムを地域で連携して構築することが挙げられます。高度先進医療から地域医療までを担えるリハビリテーション科医師を育成する必要がある、地方会がその教育プログラムの立案・遂行に主体的に取り組むことが望まれます。

第三に、これらの活動を学会から財務的に独立して行えるマネジメントが求められます。事業の自由度が増えた

一方で、経理処理と監査を地方会として行うこととなりました。やるべきこと、やりたいことが沢山あっても、経済的基盤なしには始まりません。10年先のビジョンを描き、優先順位を決めて取り組むことが大切です。最近では、参加申し込みや抄録公開をソーシャルネットワークで行い経費を削減している研究会もあるようです。若手のアイデアと実行力を引き出し活用することが重要です。

さらに、他の地方会との連携、学会との連携を通して、常に自らを相対的にみて改善を継続していくことにより、地方会は、これからも学会を支え、リハ医学・医療の発展と普及に貢献する組織であり続けると考えます。

北海道地方会

代表幹事

石合 純夫（札幌医科大学医学部リハビリテーション医学講座）

事務局連絡先とHPアドレス

札幌医科大学医学部リハビリテーション医学講座内

〒060-8543 札幌市中央区南1条西16丁目

TEL：011-611-2111(代) FAX：011-618-5220

<http://web.sapmed.ac.jp/reha-tihoukai/index.html>

所属都道府県

北海道

地方会のあゆみ

北海道におけるリハ関連の学会としては、1964年の「第1回北海道肢体不自由リハビリテーション学会」に始まり、1966年から「北海道リハビリテーション学会」と改称されたメディカルスタッフを含む学会がありました。北海道地方会は他の地区と同様に1997年4月に活動を開始し、1997年4月から2011年3月までは北海道大学病院リハ科が、2011年4月から現在まで札幌医科大学医学部リハ医学講座が地方会学会事務局として活動を行っています。



活動内容と今後の展望

北海道地方会では、4月と9月の年2回地方会および専門医・認定臨床医生涯教育研修会の開催と、毎年3月に専門医・認定臨床医生涯学習研修会の開催を中心に活動を行っています。生涯教育研修会では、最新のトピックスや、それぞれの分野の第一線で活躍されている先生にお話をいただき、大変勉強になる内容となっています。この地方会、研修会に加えて昨年の6月には札幌医科大学講堂にて「体の働きを知り、内臓と手足の力を発揮する！」をテーマに市民公開講座も開催され、たくさんの市民の皆様に参加していただき好評を博しました。

2011年6月には旭川医科大学に現在の大田哲生先生が初代教授として就任され、道内3大学医学部にリハ科が開設されたこととなります。今後は道内3大学、中核都市を中心に、北海道という広域なりハ医療の診療・研究・教育が充実してくることが期待されます。

地域のアピール

北海道という地理的特性により広域なりハ医療圏を有しています。2013年3月現在、道内専門医は61名となっていますが、大学病院を中心に、道内の医療機関・福祉機関から多くの派遣要請が寄せられています。現状ではその要請に応えきれず、患者様や障害者の方々に充実したリハ医療を提供できていない状況です。中核都市の診療支援のために空路での通勤も地域特性をよく象徴しています。中核都市の中にも回復期病棟がない地域、リハ科専門医のいない地域も存在し、道内でのリハ医療の地域格差も存在しています。地方会としては教育体制を整え、人材を育成し、道内の医療・福祉機関のリハ水準の向上を図っていきたくと考えています。このためには、北海道のリハ科医研修体制や広域な地域の取り組みを、道内だけでなく全国にアピールしていきたくと考えています。

（札幌医科大学医学部リハ医学講座 青木 昌弘）

東北地方会

代表幹事

出江 紳一（東北大学大学院医工学研究科
リハビリテーション医工学分野）

事務局連絡先とHPアドレス

東北大学大学院医学系研究科肢体不自由学分野
〒980-8575 宮城県仙台市青葉区星陵町2-1
TEL：022-717-7338 FAX：022-717-7340
E-mail：reha@med.tohoku.ac.jp
http://square.umin.ac.jp/jarm-thk/

所属都道府県

青森県、岩手県、秋田県、山形県、宮城県、福島県

地方会の歩み

東北地方会は1979年5月に中村隆一先生が東北大学医学部付属温泉医学研究施設の教授に着任されたのを機に、東北地方のリハビリテーションをさらに充実させる一環として「宮城リハビリテーション医学懇話会」が設立されたことに始まります。第1回は1980年1月19日で、発会式の後、中村先生の「運動学の歴史と現状」と題しての記念講演がありました。1981年からは懇話会が主催する形で「宮城リハビリテーションセミナー」が年1回程度開催され、その後、1990年の第7回セミナーから、日本リハビリテーション学会の認定臨床生涯教育研修制度に基づき「東北リハビリテーション懇話会」と改称されました。さらに1997年に岩谷力先生により開催された「第14回東北リハビリテーション懇話会」が日本リハビリテーション学会の制度改正で「第1回日本リハビリテーション東北地方会」となり現在に至っております。

活動内容と今後の展望

東北地方会では現在、年に2回の学術集会で会員の一般演題の発表と専門医・認定臨床生涯教育研修会を開催しています。春は宮城県、秋は他の5県の幹事がもちまわりで開催責任者として学術集会を運営しています。2012年3月9日に仙台市で「第33回日本リハビリテーション学会東北地方会」が水尻強志先生の主催で開催されました。これとは別に、年1回、各県の幹事が持ち回りで開催責任者を務め専門医・認定臨床生涯教育研修会を開催しています。

また、東北地方会として、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故におきましては、原発から23km地点にある南相馬市立総合病院へのリハビリテーションのボランティア派遣を現在でも支援しております。

今後の展望としましてはIT化を進め、学術集会の抄録の投稿や閲覧、リハビリテーション連携をホームページ上でできるようにしたいと考えています。

地域のアピール

2010年12月4日には東北新幹線も青森まで開通し、東北6県の県庁所在地が新幹線でつながれました。首都圏では当たり前のことと思われませんが、東北地方としては長年の念願であり、意義の大きいことです。これにより東北6県は各都市が1～3時間程度でアクセスが可能となり、今後はより結束を深めた地方会の活動を行っていかうと考えています。

（東北大学大学院医学系研究科肢体不自由学分野 近藤 健男）

関東地方会

代表幹事

芳賀 信彦（東京大学医学部リハビリテーション医学）

事務局連絡先とHPアドレス

東京大学医学部リハビリテーション医学
〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1
TEL：03-3815-5411（内線35180） FAX：03-5684-2094
E-mail：todaireh-acd@umin.ac.jp
http://square.umin.ac.jp/jrmkanto/index.html

所属都道府県

新潟県、茨城県、栃木県、群馬県、千葉県、東京都、埼玉県、神奈川県、山梨県

地方会の歩み

関東での学術集会は、1972年6月に横浜市大 土屋弘吉先生が代表発起人となり開催された『第1回関東地方リハビリテーション懇話会』が始まりである。その後1996年日本リハビリテーション学会の新地方会制度のもと第85回で懇話会は幕を閉じ、1996年10月に横浜市大 安藤徳彦会長のもと『第1回日本リハビリテーション学会関東地方学術集会』へと引き継がれた。現在は年3回開催されており、2001年10月には懇話会と合わせて通算第100回の会が昭和大 森義明会長のもと開催され、また2011年12月には帝京大 栢森良二会長のもと新地方会制度での第50回記念大会が開催された。現在は第54回大会が本年2月に木村慎二会長のもと新潟で開催された。事務局は代表幹事のもとにおかれ、横浜市大⇒東京慈恵医大⇒昭和大と受け継がれ、現在は東京大学に事務局がある。

活動内容と今後の展望

学術集会は年に3回開催され、一般演題20題前後と専門医・認定臨床生涯教育研修会として2演題の講演会が開催され学術集会参加と合わせて30単位の取得が可能である。学術集会は東京で開催されることが多かったが、最近では大会会長の地元での開催も増えている。また、各県単位や地方会支部での勉強会や講習会、生涯教育研修会も行われており、会員の意識も高まってきており、関東地方会の学術集会参加者は年々多くなってきた。しかし、地方会に所属する会員数からすると参加率は他の地方会に比べまだまだ低い状態である。幹事会は年に2～3回行われ、総会は毎年1回9月頃に行われる学術集会に合わせて行っている。

地域のアピール

関東地方会は、関東各県に、山梨県、新潟県を加えた広範囲の地域で構成されており、会員数約2,700人の会員が所属しており、代議員数も最も多い地方会である。医学部を有する大学も多く、その中でリハビリテーション講座のある大学や古くからリハビリテーションが行われてきた大学も多い。また、古くから学会が開催されるなどリハビリテーションに対する意識が高い地域の1つである。しかし、会員数の割には地方会学会への参加人数の割合は低迷しており今後の課題である。その一方で、最近では各県単位や各支部での勉強会や研修会が活発に行われてきており、リハビリテーション・医療の裾野が広がりつつある。また、一昨年から新専門医のための、若手専門医の会を発足し研究や臨床を含めた様々な面での交流をはかっている（写真）。



（昭和大学保健医療学部リハビリテーション医学 川手 信行）

中部・東海地方会

代表幹事

近藤 和泉（国立長寿医療研究センター）

事務局連絡先とHPアドレス

藤田保健衛生大学医学部リハビリテーション医学 I 講座内

〒470-1192 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98

TEL：0562-93-2167 FAX：0562-95-2906

E-mail：centreh@fujita-hu.ac.jp

http://www.fujita-hu.ac.jp/~rehabmed/chubutokai/

所属都道府県

長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県

地方会のあゆみ

1984年に東海地区のリハビリ医学・医療の発展を図るため、リハビリ科医師や療法士、看護師などの職種が集まり、東海リハ懇話会を発足した。1991年には信州リハ研究会や静岡リハ医学会と共同で、東海地区（岐阜県、静岡県、愛知県、三重県）や北陸地区（富山県、石川県、福井県）、山梨県、長野県、滋賀県の一部の日本リハ医学会会員312名から成る中部リハ医学会を発足した。その後、日本リハ医学会地方会充実化の動きに呼応し、1997年4月に日本リハ医学会中部・東海地方会として活動を始めた。

活動内容と今後の展望

地方会には2013年1月時点で学会正会員1,167名、専門医190名が所属している。年2回の会員による学術集会と生涯教育研修会を同

時開催し、各県でも生涯教育研修会を行っている。現在、会員数に大きな変動はなく、学術集会の参加人数も70～90名程度で推移しており、若手医師の参入は少ない。2013年度医学生セミナーは中部・東海地方で10施設開催予定であり、昨年度セミナーでは19名（藤田保健衛生大学）の参加があった。今後も継続して、医学生や若手医師にリハビリ科医師の重要性を周知させ、専門医の拡大再生産を図り、リハビリ医学・医療の教育とリクルートに力を注いでいく所存である。

地域のアピール

地方会所属5県の地域範囲が広いこと、定期開催の学術集会と生涯教育研修会は会員が参加しやすい名古屋で開催し、参加が困難な会員に対しては各県で積極的に生涯教育研修会を行っている。中部・東海地方で開催した第7回日本リハ医学会専門医会学術集会は約1,000名の参加があり、盛会裡に終了した。来年度開催の第51回日本リハ医学会学術集会に向けて地方会全体で盛り上げていこうと思っている。（藤田保健衛生大学医療科学部リハ学科 尾関 恩）



北陸地方会

代表幹事

染矢 富士子（金沢大学医薬保健研究域保健学系）

事務局連絡先とHPアドレス

金沢大学医薬保健研究域保健学系 中川 敬夫

〒920-0942 石川県金沢市小立野5-11-80

TEL：076-265-2617 FAX：076-234-4372

E-mail：tnkgw@mhs.mp.kanazawa-u.ac.jp

http://plaza.umin.ac.jp/~Reha_hok/

所属都道府県

富山県、石川県、福井県

地方会のあゆみ

1979年9月27日に医師61名、PT 310名、OT 149名、ST 29名、その他26名の計575名で北陸リハビリテーション医学集談会が発足し、金沢大学整形外科野村進教授が会長に就任した。1996年9月1日に第35回北陸リハ医学集談会をもって解散し、1997年3月22日に日本リハ医学会会員を構成員、会長を立野勝彦教授とする、日本リハ医学会北陸地方会が発足し、第1回日本リハ医学会北陸地方会を開催した。2003年3月15日には会則を現行のものに改定し、第13回日本リハ医学会北陸地方会を開催。2009年3月に会長が染矢富士子に交代し現在に至っている。

活動内容と今後の展望

年2回の北陸地方会を金沢市で開催し、生涯教育研修会を同時開催で2講演（20単位）ずつ企画している。講演内容は、地方会毎に幹事会を招集し、内容に偏りがないように配慮している。市民公開講座は、2011年11月に金沢医科大学の影近謙治教授企画により金沢市で開催され、2015年度にも開催予定がある。ところで、2011

年の第6回日本リハ医学会専門医会学術集会にあわせて、地方会会員全員に活動状況についてのアンケート調査を行ったところ、地域内での連携や行政活動に携わっている一方、今後に向けて更なる地域連携や貢献、啓発活動についての会員の意欲の高いことが示された。また、2013年3月の地方会において、福井県立病院の山口朋子先生を会長に地方会の中に女医をサポートする会を立ち上げることが承認された。

地域のアピール

北陸地方会は地方会の中で最も規模が小さいこともあり、まとまりやすいという特性を持っている。このため、2005年に金沢で開催された第42回日本リハ医学会学術集会では、他県を含めた地域ぐるみの応援を得て運営することができた。最近では2013年3月1日に回復期リハビリテーション病院協会による第21回研究大会がやわたメディカルセンターの勝木保夫院長により盛大に開催された。また、地方会の一般演題の発表者として若手の先生だけでなく、リハビリ科専門医も積極的に参加しており、レベルの高い内容となっている。会員数に占める専門医数の比率も全国平均に匹敵しており、専門医の養成など質についても確保されている。

（金沢大学 八幡 徹太郎・染矢 富士子）

第33回北陸地方会生涯教育研修会での東北大学の上月正博先生のご講演



近畿地方会

代表幹事

佐浦 隆一(大阪医科大学総合医学講座リハビリテーション医学教室)

事務局連絡先とHPアドレス

〒600-8815 京都府京都市下京区中堂寺栗田町93
 京都リサーチパーク6号館3階 有限会社セクレタリアット内
 TEL&FAX: 075-315-8472(月水金10:00~18:00※祝日を除く)
 E-mail: office@kinkireh.com
 http://www.kinkireh.com

所属都道府県

滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県

地方会のあゆみ

近畿地方会は1997年1月25日に発足しています。初代の代表幹事には故藤原誠兵庫医科大学名誉教授が就任され、発足に至る経過についての貴重な記録は地方会の広報誌であるニュースレターの通巻第9号 (<http://www.kinkireh.com/newsletter-back.html>) に記されています。2004年に住田幹男先生が代表幹事に就任されました。2007年の第44回日本リハ医学会学術集会の際には、近畿地方会幹事を中心とした組織委員会による運営が新たに取られました。2008年に菅俊光先生が代表幹事に就任されました。財務・渉外委員会が新設され、また、回復期リハ病棟の専任医を対象とした講演会が始められ、現在これは研究会に発展しています。2010年に田中一成先生が代表幹事に就任されました。ニュースレター、学術誌などのオンライン刊行などが行われました。2011年には第6回日本リハ医学会専門医学学術集会が菅先生を代表世話人として開催されています。2012年からは佐浦隆一先生が代表幹事に就任さ

れています。総務委員会が新設され、今後の取り組みとして、近畿地方会によるリハ医学会設立50周年を記念した市民公開講座の企画などがあります。

活動内容と今後の展望

近畿地方会では、1997年6月に第1回教育講演会(現在は生涯教育研修会)を大阪で、1998年1月に第1回学術集會を神戸で開催して以来、現在までに学術集會は34回、生涯教育研修会は48回を近畿全域にて開催しています。教育研修の充実のために教育委員会を中心に講演内容の領域の検討やアンケートなどが行われています。

学術誌は、会員のリハ医学知識と臨床力向上を図りリハ医学の発展に尽くすために、リハビリテーション科診療近畿地方会誌を書誌名として、2001年に第1号を発刊、以降年1号刊行し、これまで通巻12号を発行しています。掲載論文の質を維持するために、Peer reviewが論文の内容に精通した心温かいreviewerにより行われ、学術・編集委員会により編集されています。医中誌にはリハ診療近畿会誌の略称で掲載されています。

広報活動として、有意義な情報を発信して会員相互の交流を深める目的でニュースレターを広報委員会が作成しています。2004年に第1号、以降各年度2号ずつ発行し、これまで通巻17号を発行しています。2004年から立ち上げられたホームページには、学術集會・教育研修会の予定や記録、学術誌、過去のニュースレターなどを掲載しています。

JARM
Kinki

地域のアピール

以上、近畿地方会の歩みと活動を記しましたが、控えめに表現しても特色があり、活発で先駆的な活動が続けられています。今後も日本リハ医学会の歩みとともに貢献していきます。

(滋賀県立成人病センター・リハセンター 川上 寿一)

中国・四国地方会

代表幹事

伊勢 眞樹(倉敷中央病院リハビリテーション科)

事務局連絡先とHPアドレス

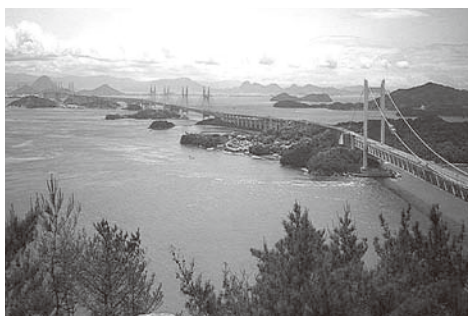
川崎医科大学リハビリテーション医学教室
 〒701-0192 岡山県倉敷市松島577
 TEL: 086-462-1111 FAX: 086-464-1186
 http://www.geocities.jp/tyusi_rehab/

所属都道府県

岡山県、広島県、山口県、島根県、鳥取県、香川県、高知県、徳島県、愛媛県

地方会のあゆみ

中国5県と四国4県を統括する中国・四国地方会は、中国四国リハビリテーション医学研究会を母体とし、1996年に発足しました。現在、地方会に加入しているリハ医学会員は約1400名で、56名の幹事から成る幹事会を設けています。学術大会は、1996年11月の第1回大会を皮きりに年1回の開催でスタートし、2000年より夏・冬の年2回開催となりました。2004年まで冬の大会は研究会(コメディカルも参加可能)と同時開催でしたが、2005年夏の大会より、夏・冬ともに地方会と研究会の同時開催となりました。現在、中国・四国地区のリハ科専門医の数は約250名(2013年2月末現在)と徐々に増加傾向ではありますが、その分布は地域による偏りもあり、引き続き多くのリハ科医の育成が



必要であります。学術大会自体も、発足当初はほとんど岡山県で開催されていましたが、近年は各県で順次開催される体制になっております。

活動内容と今後の展望

現在の活動内容としては、学術大会の開催(夏・冬年2回)と、専門医・認定臨床医生涯教育研修会(年1~2回)を開催致しております。また、2012年12月の幹事会で、「中国・四国リハビリテーション医療支援センター」を設置する構想が挙げられました。これは、中国四国地域におけるリハ科医師とリハ科で研修した医師の育成が主目的であり、今後詳細に関して議論が進められる予定です。

地域のアピール

中国地方は中国山地によって山陰地方と瀬戸内地方に、四国地方は四国山地によって南北に分かれます。瀬戸内海を中心とする瀬戸内地方は、温暖で降水量の少ないことが特徴ですが、季節風の影響を受ける山陰地方と南四国では、山陰地方で冬に雪が多く、南四国は夏に降水量が多いことが特徴です。人口分布としては、瀬戸内海沿岸地域に人口が集中しており、早くから新幹線や高速道路など交通網の整備がすすみ、工業が盛んな地域でもあります。一方、近年山陰地方では人口減少が著しく、過疎化が深刻な問題となっております。いずれの県にも有名な観光地(鳥取砂丘、出雲大社、後樂園、厳島神社、秋芳洞、桂浜、道後温泉、鳴門、金刀比羅宮等)が多く、四国地方では阿波踊りやよさこい祭りなど、有名なお祭りも開催されることから、毎年多くの観光客が訪れることでも有名です。

(川崎医科大学リハ医学教室 関 聰介)

九州地方会

代表幹事

浅見 豊子 (佐賀大学医学部附属病院リハビリテーション科)

事務局連絡先とHPアドレス

佐賀大学病院リハビリテーション科

〒849-8501 佐賀県佐賀市鍋島五丁目1番1号

<http://kyureha.umin.ne.jp/>

所属都道府県

福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、
鹿児島県、沖縄県

地方会のあゆみ

九州におけるリハ医療の研究会の始まりは、熊本大学整形外科教授の玉井達二先生が1967年に設立した「熊本リハビリテーション研究会」でした。この会は熊本県内の医師、看護師、療法士を対象とした研究会であったため、九州全地域を対象としたリハ医療の研究会が必要とされた1973年、熊本大学整形外科所属であった緒方甫先生と浅山湜先生が発起人となって「九州リハビリテーション医学懇話会」が設立されました。九州リハビリテーション医学懇話会は第41回まで開催されましたが、1994年には現在の日本リハ医学会九州地方会の前身となる「九州リハビリテーション医学会」に改組されました。その後、日本リハ医学会が地方会制度を導入することを機に、1997年から日本リハ医学会九州地方会として運営され、現在に至っています。(参考文献：蜂須賀研二「九州地方会の歩み」Jpn J Rehabil Med 2012 ; 49 : 834-836)

活動内容と今後の展望

九州地方会は学術集会の開催地輪番制を採用しており、合計15回の開催を日本リハ医学会会員数に基づいて、福岡県5回、熊本県3回、鹿児島県2回、その他の県1回ずつで一巡するようになっています。輪番制での学術集会の開催には地域のリハ科医に負担や、

交通の不便な地域での開催では参加者に面倒を強いることにもなるのですが、開催地では地域の連帯意識を育み、また参加して下さる他県のリハ科医との交流を深めることになり、ひいては九州全体のリハ医療のレベルだけでなく、責任感や一体感を高めていくことになると思います。

地域のアピール

今回の第33回日本リハ医学会九州地方会は福岡県久留米市の久留米大学旭町キャンパス内の筑水会館大ホールにて行われました。会場のすぐ裏には久留米藩当主有馬氏の居城であった久留米城址の石垣を臨む、閑静な環境で行われた学術集会でしたが、一般演題は症例報告から今日注目のボツリヌス療法関連や震災復興支援の経験から学ばれた大災害におけるリハ医療の役割とバラエティに富み、教育講演では宇宙飛行士帰還後リハプログラムや促進回復療法のメイヨークリニックでの研究報告等のわくわくするような最先端の内容と我々に身近な膝関節疾患へのリハ処方のポイントが分かりやすく解説され、活発な質疑応答は止むことなく大いに盛り上がり、盛会の裡に幕を閉じました。

(鹿児島大学大学院リハ医学 大瀧 倫太郎)



《広報委員会》

第3回リハビリテーション写真コンテスト 締め切り再延長のお知らせ

広報委員会では、第3回リハビリテーション写真コンテストを開催しています。この度、応募締切を延長致しましたので、引き続き、たくさんのご応募をお待ちしております。

【応募要項】

- 1) 応募締切：2013年8月31日
- 2) 応募資格：本学会会員および本学会会員が勤務する施設の職員
- 3) 募集作品：リハビリテーションにかかわる臨床・教育・研究を作品のモチーフとする人物、静物、風景など
- 4) 応募方法：広報委員会宛て、「写真コンテスト応募」と明記いただき、メールに画像ファイルを添付のうえ、お送りください。添付ファイル容量は2MBまでとし、2MBを超える場合は、CD-R等メディアをご郵送ください。
- 5) 応募内容：フォーマットはJPEG形式とし、カラー、モノクロは問いません。明度・色調補正、トリミング程度の修正は可といたしますが、カラージュなどの手法を用いた合成加工は行わないでください。
- 6) 応募先：日本リハビリテーション医学会 広報委員会
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂6-32-3
E-mail : office@jarm.or.jp

※応募作品は、これまで未発表のものに限ります。

※応募作品の著作権は本学会に帰属するものとし、広報のための冊子やホームページ、ビデオ等にも活用させていただきます。

※応募作品は厳正な審査の上、優秀作品は所属、氏名とともにリハニュース等に掲載させていただきます。

※応募者には、本学会の広報活動について広報委員会から別途ご協力を求めることがございますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

第50回 日本リハビリテーション医学会 学術集会

▷ 近況報告 ◁

6月13日～15日、東京国際フォーラム

今年の学術集会が開かれる6月13日～15日もすぐそこに近づいて参り、プログラムもほぼ完成いたしました。皆様から興味深い演題を数多くご登録いただき、一般演題約700題の採択となりました。たくさんの演題登録ありがとうございました。

今回は日本リハ医学会創立50周年にあたり、通常の学術集会に加え50周年記念行事が開催されます。「**こころと科学の調和～リハ医学が築いてきたもの～**」をテーマとして日本リハ医学会創立からの半世紀を振り返り、今後の指針となるべくさまざまな企画を用意しております。会長講演に続いて米本恭三先生、江藤文夫先生にリレー形式でご講演をいただきます。上田敏先生にはカウントダウン企画講演として学会創設当時のお話しをしていただくことになっておりま

す。その他にも招待講演、国際シンポジウム3題を含むシンポジウム、パネルディスカッション、鼎談、教育講演などでテーマに沿った企画を考えました。また、参加いただく先生方にご満足いただけるような試みも企画しております。

50周年記念事業としては学術集会の初日に記念式典が執り行われますが、それに先立ち千野直一先生ならびに海外から2名の先生による記念講演が行われます。また、リハ関連職種シンポジウム、特別企画講演、国際シンポジウム「アジア・リハ医との交流」なども企画されております。

会場である東京国際フォーラムはJR有楽町駅の目の前であり、新幹線はもちろん羽田空港・成田空港からのアクセスもよく、次の週に連続して行われるISPRM北京大会への参加予定

の先生方にもご都合がよろしいかと思っております。その他、宿泊や託児施設についてもホームページ (<http://www.congre.co.jp/jarm2013/>) でご案内しております。多くの先生方のご来場をお待ちしております。

また、学術集会に先駆けて6月8日(土)午後1時よりリハ医学会創設50周年記念市民公開講座「高齢者を生き生きと生きる～よりよく・より幸福に・よりいきいきと生きるために～」を五反田ゆうぽうと大ホールにて開催します。基調講演2題と特別講演としてタレントで聖徳大学短期大学部客員教授も務められている毒蝮三太夫さんにお話をいただきます。楽しく興味深いお話をいただけるかと期待しております。こちらも合わせてご参加いただければと思います。(依田 光正)

INFORMATION

<国際委員会>

日本リハ医学会では設立50周年記念事業のひとつとして、第50回学術集会で50周年企画シンポジウム「海外リハ交流医受入制度で来日したアジアのリハ医たち Present and future prospect of Physical and Rehabilitation Medicine in Asia; Significance of the traveling fellowship programs for Asian physiatrists」を企画しています。学術集会期間中の6月13日(木)午前9時25分より東京国際フォーラム・第5会場で開催が予定されていますが、このシンポジウムでは、これまでに海外リハ交流医受入制度などで来日し、現在、母国で活躍中の中国、モンゴル、インドネシア、タイ出身の5名のリハ医を演者として招き、自国でのリハ医としての活動の様子や各国のリハの現状などを報告していただきます。さらに、会場の皆様と意見交換を行うことで、このシンポジウムが今後のアジアのリハ医との交流やリハの在り方、将来像などをともに考える場となることも期待されています。アジアのリハの現状や展望を知ることで、新たな発見が得られると思いますので、多数の会員の皆様のご参加をお待ちしています。(担当委員 青木 隆明・松永 俊樹)

<教育委員会>

来る2013年7月6日(土)に品川フロントビル会議室で初期研修医等医師向けリハビリテーション研修会を開催する予定です。初期研修医および転向希望の医師に向けた各研修施設からのアピールもポスターなどで行う予定ですので、対象医師だけでなく指導に当たっているリハ科医の参加もお待ちしています。

生涯教育研修会に関しては、2f、2gの申請期間短縮等について、なるべく速やかに実行していく予定です。

病態別研修会は、例年9月に開催していた「骨関節障害」を7月に早めるとともに開始時間も少し遅らせて実施する予定です。遠くから参加される先生方の利便性向上につながればと思います。

第4回専門医試験受験支援講座を、第50回学術集会総会期間中6月15日(土)午後1時に会場内で開催予定です。リハ科専門医資格取得を検討されている先生方を対象とした入門講座です。より専門的な知識の修得をご希望される場合は、上記の病態別研修会にご参加ください。

新専門医制度に向けた指導医マニュアル・研修プログラムの見直しや研修会の整備についても継続審議中です。今後、専門医試験受験や資格更新に必須となる倫理安全に関する講習会も第50回学術集会で開催予定です。こちらもより簡単な受講確認システムへの変更を検討中です。(委員長 羽田 康司)

<診療ガイドライン委員会>

診療ガイドライン委員会では、現在、以下のガイドライン策定委員会が活動を行っています。最近の動向をまとめました。

名称	最近の動向
脳卒中治療ガイドライン策定委員会 (委員長 藤原 俊之)	脳卒中治療ガイドラインの改訂作業が始まる。今回のガイドラインは脳卒中学会が中心となってガイドライン委員会を組織し、各学会がそこに参加する形で作業が行われる予定。本学会策定委員会委員は脳卒中ガイドライン委員会（脳卒中学会）リハ部門の委員を兼務、脳卒中ガイドライン委員会（脳卒中学会）の園田茂班長は本学会策定委員会特別委員を兼務。
脳性麻痺リハビリテーションガイドライン策定委員会 (委員長 高橋 秀寿)	ガイドライン第2版の作成に向け作業実施中。ガイドライン原案について、本医学会会員対象のパブリックコメント募集は終了。設立50周年記念事業企画「脳性麻痺リハビリテーションガイドライン」（出版社未定）として出版予定。
呼吸リハビリテーションガイドライン策定委員会 (委員長 上月 正博)	本学会策定委員会および日本呼吸ケア・リハビリテーション学会呼吸リハビリテーション委員会ワーキンググループ、日本呼吸器学会呼吸管理学術部会、日本理学療法士協会呼吸理学療法診療ガイドライン作成委員会が編集した「呼吸リハビリテーションマニュアルー運動療法ー第2版」（昭林社）は2012年11月に出版された。策定委員会はその役割を終えたことから、2013年3月に解散。
リハビリテーション連携パス策定委員会 (委員長 橋本 茂樹)	地域包括ケアシステムの導入が促進されつつある現状の中、地域との連携を促進し、リハビリテーション医療の関わり方やリハビリテーション科医の役割などについて啓発していくために、「リハビリテーションと地域連携・地域包括ケア（仮）」（診断と治療社）の策定作業継続中。設立50周年記念事業企画として2013年5月末に出版を予定。
障害者体力評価ガイドライン策定委員会 (委員長 古澤 一成)	ガイドラインの作成に向けて脊髄損傷と脳血管障害のグループに分かれて作業継続中。ガイドライン原案について、本医学会会員対象のパブリックコメント募集は終了。設立50周年記念事業実行企画「障害者体力評価ガイドライン」（金原出版）として2013年6月に出版予定。
神経筋疾患・脊髄損傷の呼吸リハビリテーションガイドライン策定委員会 (委員長 花山 耕三)	ガイドラインの作成に向けて作業実施中。総論は原案完成、各論については原案の作成作業継続中。設立50周年記念事業企画として、2014年春までの出版を予定。
がんのリハビリテーションガイドライン策定委員会 (委員長 辻 哲也)	平成22～24年度厚生労働科学研究補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）「がんのリハビリテーションガイドライン作成のためのシステム構築に関する研究（主任研究者 辻哲也）」として、作業実施中。ガイドライン原案について、本医学会会員対象のパブリックコメント募集は終了。設立50周年記念事業実行企画「がんのリハビリテーションガイドライン」（金原出版）として、2013年4月に出版予定。 本策定委員会委員、関連学協会からの推薦委員によるワーキンググループにより2013年3月に「がんのリハビリテーショングランドデザイン」が完成、ガイドラインとともに全国癌診療連携拠点病院に配布予定。活動の一環として、2013年1月12日に笹川記念会館（東京都港区）にて「第2回がんのリハビリテーション懇話会（50周年記念事業企画）」を開催、全国から300名余りが参加（報告：本号p.15）。
大規模災害対応リハビリテーションマニュアル策定委員会 (委員長 上月 正博)	東日本大震災リハビリテーション支援関連10団体では、今後の大規模災害に多職種が連携して対応できるような基盤をつくるために、本医学会の里宇（前）理事長がワーキンググループ委員長となり、「大規模災害対応リハビリテーションマニュアル」（医歯薬出版）の策定を合同で行い、2012年5月に出版された。本医学会においても本策定委員会を立ち上げ、10団体の動きと連動して作業を行った。策定委員会はその役割を終えたことから、2012年7月に解散。

2012年度は2つのガイドライン（呼吸リハ、大規模災害）が出版されました。4つのガイドライン・書籍（脳性麻痺、連携パス、体力評価、がんのリハ）については、50周年記念事業企画として、設立50周年記念大会での販売を目指しています。今後の成果に是非ご期待ください。
(委員長 辻 哲也)

＜資格認定委員会＞

本委員会では、2017年度の新専門医制度に対応すべく、専門医制評価・認定機構（以下、専認構）の方針に沿った本医学会専門医制度対策委員会の改定（案）をもとに、専門医ならびに指導責任者の資格認定・更新要件の改定作業を現在実施しております。改定案の状況を会員の皆様にお知らせいたします。特に、現在の要件と異なったものを中心に列挙いたします。

- 1) 専門医の資格認定要件：専門医の試験受験申請および資格更新の必須要件として医療倫理・安全に関する指定講演受講を加えることとしています。既に教育委員会主催で上記指定講演が実施され受講証明書が発行されています。資格更新に必須とする会則の改正は2013年度（2014年4月適用）に実施する予定で、周知のための移行措置期間も設けます。なお、受験申請に必須とする会則の改正は、専門医制度改革に合わせた他の要件の検討が今度とも必要であり、2014年度（2015年4月適用）に予定しています。
- 2) 指導責任者の資格認定要件：専門医資格取得後3年以上、リハビリテーションに関する筆頭著者論文1篇以上（専門医試験の受験資格から論文要件が撤廃されたため、指導責任者には追加する方針）、学会発表2回以上（主演者1回以上）、指導医講習会の受講を新たな追加要件としています。指導医講習会の受講は更新要件にも追加いたします。なお、指導責任者は指導医に、代表指導責任者は指導責任者への名称変更も行います。2013年度に会則改正（2014年4月適用）予定です。
詳細は、順次学会誌やホームページ等でお知らせしていきます。（委員長 佐伯 覚）

＜関連機器委員会＞

関連機器委員会では 正しい情報を公開する責務があると考え、関連機器のデータベース作成に取り組んでおります。その前段階として、作成した関連機器分類試案に対して学会HPの掲示板を通じて、2013年1月末までパブリックコメントを募集しました。この分類案はJISやISOの分類を元にして、機器の検索が行いやすいようにする目的で作られたものです。学会会員の先生方から、掲示板だけでなく、学会への投書やメールによるご意見をいただきましたので、委員会において検討を行いました。その結果を何回かに分けてお伝えしたいと思います。

- （ご意見1）** 車いすは車椅子に統一すべきと思います。
（回答） リハ用語集では車いすになっていますが、2012年4月から当用漢字に椅子が加わり厚労省の文章では車椅子が使われています。本試案も「車いす」を「車椅子」へ変更します。
- （ご意見2）** 「ロフトランド杖」を追加してはどうか。
（回答） ロフトランド杖は小項目「前腕杖」に該当します。
- （ご意見3）** プロンボードはどこに分類されますか。
（回答） 審議の結果、プロンボードについては小分類「その他の姿勢保持装置」として扱う方針にしました。（委員長 高橋 紀代）

＜関連専門職委員会＞

3月2日に関連専門職委員会が八重洲俱樂部で開催され、昨年度の報告と今年度の事業計画の策定を行いました。まず、報告事項として

- ①医療研修推進財団主催の理学療法士、作業療法士養成施設等教員講習会受講者の最終判定会議出席及び、修了式出席。今年度

から言語聴覚士参加のための準備。

- ②特定看護師の最新情報。
- ③産科医療保障制度の普及・啓発。
次に、今年度の活動計画について
- ①医療研修推進財団主催研修会開催に向けての協力及びアドバイスの継続。
- ②特定看護師の情報収集を行い、動向把握。
- ③リハ関連専門職種教育とリハ科専門医とのマッチング。
- ④各職能団体へのアンケート。
- ⑤関連団体との連携（さしあたっては臨床心理士の国家資格化問題）。
- ⑥小児高次脳機能障害問題。

等に関して討論を行いました。具体的には各項目につき理事会の承認を得たのちに活動を開始する予定です。

（委員長 武居 光雄）

＜評価・用語委員会＞

リハビリテーション医学評価法データベース鋭意作成中！

1998年以来、当委員会ではリハビリテーション（リハ）関連雑誌の原著論文に使用されている評価法を継続的に調査しています。関連雑誌には、学会誌（Jpn J Rehabil Med）のみならず、Disability and Rehabilitation、Archives of Physical Medicine and Rehabilitationなどリハ分野で多く投稿、購読されている英文雑誌も含んでいます。毎年発刊されるこれらの雑誌を、委員全員が担当して目を通し、論文中に使用されている評価法を抽出して分類整理を行っています。大変な作業ではありますが、これによって、リハ関連分野で使用されている評価法の年次変化や最新の動向を知ることができ、臨床現場における患者の評価や論文作成に際して、少しでも会員の皆様のお役に立つことができれば、委員一同、大変嬉しく思います。これまでの調査は当学会ホームページより確認できますが、本年度は10年分のデータが蓄積される予定であり、「リハ関連雑誌における評価法使用動向調査」の集大成を行うべく、現在奮闘中です。（委員 大沢 愛子）

＜広報委員会＞

私が広報委員を拝命してから6年以上が過ぎました。広報委員長も務めてきましたが、この間に就任した理事長は3代を数えます。また、法人としての学会の形態も変わり、地域ごとの代議員選挙も行われるようになりました。新たな体制でのリハ医学会が整いつつあり、今後が楽しみです。

これらの新しい動きの中で、昨年度末に私は広報委員長から退き、新たな委員長の下での広報委員会が立ち上がります。広報委員会の活動は多岐にわたりますが、一般の方々および他科の医師へのリハの啓発活動および医学生や若手医師がリハ医学に興味をもち、より多くの方がリハ科専門医になる志が持つようになることが、委員会の任務であると考えています。私が、広報委員長になってからは、新たな活動として、女医会との連携、座談会、リクルートのための小冊子の作成、ホームページの改変あるいはスマートフォン版のホームページの立ち上げ、などの試みを行ってきました。広報委員会の今後の活動がどのようになるのかは、新しい広報委員および理事会が担っていくことですが、私はそのような活動から少し離れた立場に立つことで、広報委員会の新たな展開を眺めさせていただくことになります。

（前委員長 阿部 和夫）

<関東地方会だより>

第54回の関東地方会学術集会と専門医・認定生涯教育研修会は、新潟大学医歯学総合病院総合リハビリテーションセンターの木村慎二先生が会長をされ、2013年2月2日(土)に「新潟ユニゾンプラザ」で開催されました。雪もほとんど無く、静かな新潟でしたが、演題数が非常に多く、新潟の底力を肌で感じる会となりました。演題数の多さから発表時間がやや短めではありましたが、整然と進行が進み、その上活発な議論がなされ、参加者全員が勉強になった充実した会となりました。研修会では、大森豪先生(新潟大学研究推進機構超域学術院教授)と、川平和美先生(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科リハビリテーション医学分野教授)にご講演を賜り貴重なお話を拝聴できました。関東とは言え東京中心になりがちな傾向に一石を投じられ、木村先生、遠藤先生はじめ新潟大の先生方のご尽力の賜で、今後の地方会の活性化を象徴するような盛大な会となりました。

第55回日本リハ医学会関東地方会と専門医・認定生涯教育研修会は、山梨リハビリテーション病院の川上純先生が会長をされ、2013年9月14日(土)14時より(予定)「山梨県立図書館」にて行う予定です。研修会の予定はまだ決まっておりませんので、また後日ご案内申し上げます。皆様のご参加をお待ちしております。詳細は関東地方会ホームページ(<http://square.umin.ac.jp/jrmkanto/>)をご参照ください。(事務局幹事 緒方 直史)

<中部・東海地方会だより>

中部・東海地方会では、第33回地方会学術集会と専門医・認定臨床生涯教育研修会を2013年8月31日(土)に予定しています。研修会は渡邊 修先生(東京慈恵会医科大学附属第三病院)に「認知リハビリテーションのエビデンス」を、上月正博先生(東北大学大学院医学系研究科機能医科学講座内部障害学分野)に「災害リハビリテーション：来るべき大震災にどのように備えるか?」をご講演いただきます。ご参加のほど、よろしく申し上げます。学会ならびに専門医・認定臨床生涯教育研修会の詳細は中部・東海地方会のHP(<http://www.fujita-hu.ac.jp/~rehabmed/chubutokai/>)をご覧ください。

(代表幹事 近藤 和泉)

<近畿地方会だより>

日本リハ医学会は1963年9月29日に設立され、2013年の今年設立50周年を迎えます。設立50周年記念事業の一環として、昨年9月29日が「リハビリテーションを考える日」として制定されています。この日をきっかけに、リハを受ける側だけでなく行う側も含めて、リハについて考え、リハをもっと知ってもらえればとの思いが込められています。以前から各地方会が持ち回りで行っていた市民公開講座が今年は近畿地方会が当番になっていますが、今年は9月29日の「リハビリテーションを考える日」に開催を計画しています。今年は日曜日となっていますので、是非多くの方々に参加していただければと思います。詳細が決まりましたら、近畿地方会ホームページ等にてご案内させていただきます。皆様、多くの方への広報をお願い致します。

今年度の地方会学術集会、生涯教育研修会も以下のように予定されています。こちらの方にも、どうぞご参加ください。

第48回生涯教育研修会：6月1日(土) 神戸大学医学部会館シスメックスホール、第49回生涯教育研修会：6月29日(土) 森之宮病院 ウッディホール、第35回学術集会：9月21日(土) 大阪大学 中ノ島センター(予定)、第50回生涯教育研修会：11月2

日(土) 大阪(場所未定)、近畿地方会 専門医・認定臨床生涯教育研修会：11月の土曜 京都・兵庫(場所未定)、第36回学術集会：2014年2月～3月の土曜 京都(場所未定)

(広報委員会委員長 川上 寿一)

<中国・四国地方会だより>

2013年7月7日(日) 島根県松江市において「くにびきメッセ」を会場に開催する第36回中国・四国リハビリテーション研究会ならびに第31回日本リハ医学会中国・四国地方会に関する2回目のご案内です。

前回のご案内では、特別講演(教育研修)の一つを相澤病院の原寛美先生で予定していましたが、原先生のやむを得ぬ御事情により慈恵医大第3病院の角田亘先生に変更させていただき「脳卒中急性期リハの現状と未来」と題してお願いすることとなりました。他の二つの講演については予定通り愛知県青い鳥医療福祉センター・センター長の岡川敏郎先生に「脳性麻痺児の補装具療法ー脳性麻痺リハビリテーション・ガイドラインに沿ってー」、ランチョンセミナーとして鳥取大学医学部保健学科教授の萩野浩先生に「高齢者骨折の予防・治療とリハビリテーション」を予定しています。

山陰は交通の便に恵まれない地域ですが、2013年3月に中国自動車道に接続する松江・三次間の自動車道「松江道」が開通となり、九州や中国地方西部からのアクセスが向上しています。また、出雲大社は3年にわたって行われていた60年に一度の大遷宮が完了の年を迎えました。時間が許せば城下町松江の風情にふれた後、出雲市まで足を延ばして神々の国出雲を肌で感じていただくのも一興ではないかと思えます。

演題の受け付けは4月1日から5月13日までとする予定です。たくさんの方にご参加いただきますようご案内申し上げます。

(担当幹事、会長 東部島根医療福祉センター 伊達 伸也)

<九州地方会だより>

第33回九州地方会学術集会は、志波幹事(久留米大学医学部整形外科・教授)の担当で、本年2月24日(日)久留米大学筑水会館で開催され、盛会裏に終了しました。午前一般演題は16題、午後からは生涯教育講演があり、志波会長のご尽力と興味ある演題、講演の相乗効果により多数の参加で充実した学会となりました。

次回、第34回学術集会は、川口幹事(長崎県障害者福祉事業団つくも苑診療所・所長)の担当で、本年9月8日(日)、長崎大学医学部記念講堂で開催され、午前の一般演題と午後から3題の生涯教育研修会を予定しております。多くの会員の皆様のご一般演題のご応募(締切7月8日)、ご参加をお願い申し上げます。詳細は九州地方会ホームページ(<http://kyureha.umin.ne.jp/>)をご覧ください。

幹事会・総会報告(本年2月24日開催)：地方会幹事の改選が行われ、新幹事として佐久川明美先生(新吉塚病院・リハ科部長)、原口和史先生(済生会八幡総合病院・副院長)、本重博史先生(社会福祉法人向陽会・理事長)が、また、新監事として浜村明徳幹事、田中信用幹事が選出され承認されました。また、浅山滉監事、鳥巢岳彦監事、岩坪暎二幹事の顧問就任が承認されました。

2013年度から代表幹事が川平幹事から浅見幹事へ、それに伴い地方会事務局が鹿児島大リハ科から佐賀大学リハ科へ、また、生涯教育担当幹事が浅見幹事から志波幹事へ交替します。なお、生涯教育事務局、同担当幹事は鹿児島大学リハ科および筆者下堂菌が継続致します。今後ともご協力を賜りますよう何卒よろしくお願ひ申し上げます。(事務局担当幹事 下堂 菌 恵)

独自の・先駆的事業を実践する 地域リハビリテーション広域支援センターの紹介③

▶ 長崎県県南地域リハビリテーション広域支援センター

長崎県県南地域リハ広域支援センターは、長崎県の8地域医療圏の中で、島原半島の雲仙市・島原市・南島原市の3市の県南地域を担当しています。この県南地域は、人口約15万人で高齢化率約30%と既に超高齢社会となっていて、人口減少が始まっている地域です。主に農業・漁業の第1次産業が盛んで、雲仙普賢岳・雲仙国立公園のある観光の地域でもあります。

当広域支援センターは、(医社)東洋会池田病院が指定を受け、協力機関に(医)伴帥会愛野記念病院・(医)栄和会泉川病院・(社)島原南高歯科医師会と県南保健所と協力しながら、地域リハの啓発及び充実を目的に活動しています。

今回は、長崎県島原市にて開局されている「コミュニティFM事業」の「FMしまばら」を利用した取組みを紹介します。

2009年8月より、リハに関する悩みや相談を受ける役割を担っている地域リハ広域支援センターにて、FM放送を媒体として、リハについての相談室を開設することによって、地域の方々にリハの理解と啓発に繋げることを目指してこの取組みを始めました。高齢や障害のために、介護が必要になった方々やご家族の悩みや問題点を解決し、長く住み慣れたこの地域で暮らせるように少しでもお役に立てばと思い開始しました。毎週火曜日の午後6～7時の1時間、FMし

まばらのパーソナリティーと医療・リハ担当に医師・リハスタッフ、介護担当に介護支援専門員などが各週担当し放送を続けています。この取組みには、島原市の基幹病院の長崎県島原病院・医師会・NPOしまばら・包括支援センターにも協力していただいています。



内容は、専門医による各疾患の予防・検査・治療などの紹介、リハ職によるリハの内容紹介、介護支援専門員より介護サービスや施設の紹介などであり、毎週テーマに沿って生放送でお送りしています。また、視聴者からの質問や相談のFAXやメールなどにもその場で対応しています。

この取組みから、「先生昨日聞いたよ!」「ラジオで聞いて来院しました!」「何時も聞いているよ!」など地域の方から声を掛けられるようにもなり、地域への広がりを感じることが多々あります。地域へ情報発信し続けることも、地域医療・地域リハ・地域包括ケアの推進に役立つと感じています。毎週テーマを決めるのが大変ですが、頑張って続けていきたいと思えます。 徳永 能治 (長崎県島原病院 医師)
高柳 公司 ((医社)東洋会池田病院 PT)

… リハビリテーション機能を強化した地域包括ケアシステム構築へ向けて …

2010年度に障害保健福祉委員会と全国地域リハ連絡協議会が協力して広域支援センター(223センター)の実態調査を実施いたしました。その中で「独自先駆的事業を行っている」と回答のあった32広域支援センター(アンケートを解析した160センター中)を対象に2011年度「広域支援センターの独自先駆的事業とリハ医のかかわり」に関するアンケート調査を実施いたしました。アンケートが回収できたのは19センター(有効回答率59.4%)でした。「独自先駆的事業」の対象は、「高齢者」、「医療職」、「介護職」をそれぞれ対象とする活動を6センター(31.6%)が、次いで「医師会」、「社会福祉協議会」、「障害者」をそれぞれ対象とする活動を2センター(10.5%)が実施していました。

「独自先駆的事業」の事業効果の自己評価では「大変効果的だった」「効果的だった」が16センター(84.2%)、「あまり効果的ではなかった」「効果的ではなかった」が2センター(10.5%)でした。「独自先駆的事業」で連携した機関は「有り」が16センター(84.2%)で、「無し」の3センター(15.8%)を大きく上回りました。

連携した機関は「行政」が10センター(52.6%)と最も多く、次いで「地域包括支援センター」「保健所」「医師会」がそれぞれ4センター(21.1%)の順でした。

「独自先駆的事業」へのリハ医の関わりは「有り」が12センター(63.2%)、「無し」が7センター(36.8%)であり、「独自先駆的事業」へのリハ医の関与の割合が高い傾向を認めました。さらに今回、アンケート結果から興味深い活動を

展開している7センターを選び、「独自先駆的事業」の「成果物」や「マニュアル」を当委員会へ郵送していただき、それを元に4センターを「リハニュース」上で紹介させていただきました。「独自先駆的事業」に関する更に詳しい活動内容や、その他にも興味深い活動を実践されているセンターをご紹介できないのが残念です。

さて今回の連載の初回(リハニュースNo.55)では、今後の超高齢社会に向けた「地域包括ケアシステム」の視点から、広域支援センター活動と地域リハの重要性について長崎大学の松坂誠應教授から解説していただきました。いわゆる「団塊の世代」が後期高齢者となる「2025年問題」とそれへ向けた「地域包括ケアシステム」の構築の必要性はまさに「まったなし」の状況です。「地域包括ケアシステム」の目標自体は、地域リハの理念とほぼ一致しています。しかし、政策としての「地域包括ケアシステム」は縦割り行政の中での政策であるために、介護保険適応外の障害児(者)あるいは難病患者等が除かれており、我々リハ医が目指す広義の「地域包括ケアシステム」の姿と比較して若干偏りがあるように思われます。我々リハ医は、広域支援センターを含めた地域リハ活動に積極的にかかわるとともに、「自立(あるいは自律)支援」と「リハ前置」の考え方から高齢者のみならず障害の種類と壁を越えた「リハ機能を強化した地域包括ケアシステム」の構築へ向けた提言を、リハ関連職種と共に行う必要があるのではないのでしょうか。

(障害保健福祉委員会 大野 重雄・角田 亘)

リハ医 への 期待

第17回

義肢装具士の立場から

北海道工業大学医療工学部義肢装具学科

野坂利也

リハ医療は、医師が情報を集約し、すべての医療関係者に指示を行うという時代から、現在では医療も複雑化し、関わる職種も増えているため、医師一人がすべての情報を把握し、指示する時代ではなくなってきたと感じる。リハ医療を担うメンバーとして、医師、看護師、薬剤師、放射線技師、臨床検査技師、セラピスト等が含まれているが、義肢装具を必要とする患者さんに対しては、義肢装具士も関わってくることになる。その場合に、情報伝達は双方向で、お互いの専門知識のチェックと補完が行われることを願っている。

ここでは義肢装具士の教育、実際のチームアプローチにどのように関与していくべきかを私見ではあるが考えてみたい。

義肢装具士の教育

国立障害者リハビリテーションセンターでの義肢装具の教育が行われてから31年が経過し、国内での4年制の大学教育が始まってから6年が経過している。現在義肢装具士の教育は、4年制の大学教育として5校、3年制の専門学校として国立で1校、私学では5校で行われている。新設の学校も多いため、本年3月の新卒の国家試験受験者数は約200名という数であった。数年後には受験者数が300名を超えることになる。初期の頃と比べさまざまな工学技術の進歩に対応する能力を養うことやオスキー（OSCE：Objective Structured Clinical Examination）といわれる臨床実習を行うための臨床能力を身につけているかを試す実技試験の導入などで、臨床に必要な資質を培うなどの工夫も必要とされている。さらに一部の義肢装具の教育における大学院教育も行われているし、義肢装具士協会を中心として全国・支部セミナーへの参加や学術大会への発表、論文の投稿などをポイント化し、生涯学習のポイント制も導入されている。

チーム医療での義肢装具士の関わり

義肢装具士は、義肢や装具を必要とする方々に対し医師の指示のもと採型・採寸および適合業務を行うことを業とする。ただ他のコメディカルスタッフと異なり病院、リハビリテーションセンター等に勤務していることが少なく、装具製作会社から出向き、病院での外来患者さんに対する装具作成は、ある程度決められた時間帯に待機し、処方された患者さんの採型、採寸を行うことが多い。病院では、理学療法や作業療法などの訓練をされている患者さんに対し、医師、コメディカルスタッフ、患者さん、家族、義肢装具士で装具作成の処方が決められることがある。

患者さんに対して装具処方は病院によって違いがあり、装具製作に対する指示が適切に伝達されていない状況がある。

入院されている脳卒中の患者さんに対する短下肢装具が処方される場合を例に考えてみたい。

- 医師から病態、予後に関する説明
- 理学療法士から身体能力評価の説明、装具の処方案
- 義肢装具士から処方案に対する意見、詳細の確認
もしシューホンプレスが処方された場合、
 - ・ポロプロピレンの厚さ
 - ・コルゲーションの有無
 - ・初期背屈角度
 - ・トリミング（足底全体がMP近位でのカットなどの足底部分のトリミング、足部の側壁のカットライン、踵部分を空けるか）
 - ・可撓性の程度
 - ・内反のある場合などのストラップの走行に対する工夫

これらの情報に関して共有することが望ましく、処方決定の際に装具を試着し、確認がされるとかなりの確率で失敗のない処方がされると考える。是非ともリハ医には、個々の患者さんの診断内容を義肢装具士に教育いただき、理学療法士と共に患者さんに必要な装具の機能を明確化していただきたい。

義足の処方に関しては、患者さんの生活環境なども含め、ソケットデザインやパーツ選択に考慮しなければいけないことが多い。

継続して義足を使用しており、修理などをする場合を例に考えてみたい。

- 医師から切断原因、合併症の状況などの身体情報、義足生活のゴール設定
- 理学療法士から健足の能力、体幹のバランス能力、義足訓練に対するモチベーション
- ソーシャルワーカーあるいは患者さんからの一時立て替えなど義足の費用面
- 義肢装具士からパーツ選択に対する意見、詳細の確認
 - ・ソケットの種類（吸着式、ライナー式、差し込み式の選択）
 - ・膝継手の種類（立脚相制御の種類、遊脚相制御の種類、価格の考慮）
 - ・足部・足継手の種類（SACH、単軸、エネルギー蓄積型の選択、価格の考慮）

義肢装具士はそれぞれのパーツ選択により機能的にどのように異なるか説明し、医師およびコメディカルスタッフ、患者さん、家族に理解が得られるように説明することが望まれる。

最後に

病院勤務である義肢装具士が数少なく、リハの場面でコメディカルスタッフとして認知されていない部分もある。日本義肢協会では写真、義肢装具士登録番号入りでの義肢装具士之証を作製し、名札として使用するようになっている。また日本義肢装具士協会でも、写真入りの会員証を名札として使用できるようになっている。是非ともこの機会にご確認いただき、コメディカルスタッフとして認知し、義肢装具製作に対するディスカッションをしていただければと考える。

専門医会コラム

2017年度から開始される新専門医制度について —総合診療医が新設、認定は第三者機関に移行—

専門医会幹事長 近藤 和泉

厚生労働省の「専門医の在り方に関する検討会」（座長：高久史磨・日本医学会会長）は2013年3月7日の会議で最終的な報告書案を了承された（同案は、厚労省のホームページに掲載：<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002wudh.html>）。検討会では同日の議論を踏まえ、正式な報告書を作成、3月中に公表する予定とされているが、このコラムを書いている段階で、その内容が新聞およびいくつかのwebsiteで、最近取り上げられており、それらをまとめてみた。

報告書案の骨子は2つあり、1つは総合診療医を基本領域の専門医として位置付ける点。もう1つは、専門医の認定と養成プログラムの評価・認定を行う「学会とは独立した中立的な第三者機関」を新たに設置することであるとされている。これまで計17回にわたった検討会の議論では、「第三者機関の運営のコアへの国の関与が否定された」（厚労省医事課）とされており、専門医制度の議論は、今後は厚生労働省ではなく医療界が自立的に進めていくことになる。国の支援としては、(1) 専門医等に関する情報の収集・管理等を行うためのデータベース構築（これにはDPCを中心とするNational database (ND) の利用が想定されている）、(2) 専門医の研修施設における養成プログラム作成に対する費用補助、の2つが現時点では可能性が高いとされている。

新たな専門医制度の基本は、基本領域の専門医を取得した上で、サブスペシャリティ領域の専門医を取得する二段階制であり、これまで日本専門医制評価・認定機構は18の専門医を「基本領域」としてきた。しかし、今回の報道では「総合診療医は基本領域に入る一方、18の専門医を基本領域に入れるか否かは今後、第三者機関で議論されることになる」（厚労省医政局医事課）とされている。特に3月9日付けの読売新聞記事で、「リハビリ」「臨床検査」などが妥当かどうか疑問の声があがっている」との報道があり、物議をかもしている。同記事について読売新聞社に確認したが、「報告書素案にあった「基本的な18診療領域」という表現が、3月7日の報告書案から削除されており、その点について事務局に問い合わせたところ、このような趣旨の回答があった」とのことであった。また基本領域の専門医の取得は原則1つだが、救急と外科、救急と脳外科、リハビリと整形、総合診療と内科などのように、自助努力で複数領域の専門医を取得すること

も認められるとされている。

第三者機関はプロフェッショナル・オートノミー（公的に認定された専門家が自己の判断で最良と考えられる決定を下すこと）を基盤として運営し、国民の代表も加わり、各学会の協力を得ることになっている。この第三者機関に関しては、日本専門医制評価・認定機構とは異なる新しいものを作ることにしているものの、事実上は同機構が発展的に解消して、新機関の事務局的な機能を担うことになる可能性が高いとされている。同機構は、「5月の総会で機構の今後の方針を決定する。その後、（第三者機関の）準備委員会を設置して、議論することになる。第三者機関は、各学会と連携・協力して運営していく。ただし、あくまで各学会の代表ではなく、各分野の専門家の立場で第三者機関の理事として入ることになる」との見通しを示している。

今後、図に示したようなスケジュールで専門医制度の構築が進んで行く。まず2013年度に医療関係者や国民代表等から成る準備組織を設け、同年度中に第三者機関を発足させる。その後、専門医の養成プログラムの認定などの準備を進め、2017年度から専門医研修を開始する医師からおおむね3年間研修の新制度の対象とする。ただし、既に専門医を取得している医師の移行措置は、「2017年度以降」と、新制度による専門医が誕生する「2020年度以降」の両論併記となったため、第三者機関で検討することとなった。

検討会で、最後まで意見が対立したのは、専門医制度と、医師不足や医師偏在の解消策との関連付けであった。検討会に提出された報告書の素案には、「専門医制度により、医師の偏在が是正されることを期待する」などの表現があった。この点に関して、検討会の委員の間に「専門医制度の見直しは、専門医の質の向上が目的」や「制

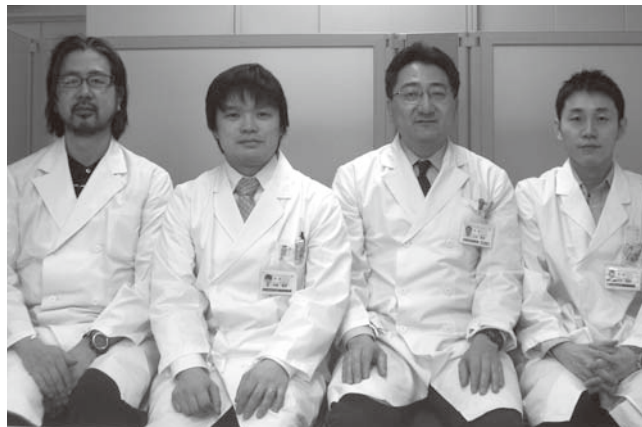


図 新しい専門医制度への構築スケジュール

度見直しにより、医師の偏在が増長されるのは問題」などの意見があった。このため「両論が出たため、何らかの折衷的な表現があるかどうかを座長と相談して決定する。質の向上が第一の目的であり、地域偏在の是正が目的であることが想起されないような表現を検討する」とされている。

さらに報告書案で、専門医制度について、「関係法令等への位置付けを検討することが望ましい」とされている点が議論となった。委員の間で「報告書の素案では、『関係制度への位置付け』だったが、関係法令等に変更された。法令に位置付けるべきという意見はなかったもので、元の表現に戻してもらいたい」、「関係制度への位置付けの方がプロフェッショナル・オートノミーを貫徹しやすいのではないか」などの意見が出たが、それに対して「専門医の在り方をより確実なものにするためには、法的なバックグラウンドがある制度にすることが望ましい」、「医療法や医師法において専門医をどのように位置付けるかを将来的に検討するよう、明記しておくことが必要ではないか」との主張もあり、高久座長は、「検討することが望ましい」とされており、断定的表現ではないことから、このままの表現を残すこととなった。「関係法令」に位置付けることにより、浮上してくると考えられるのが、専門医と標榜科との関係で、現在、政省令では原則として自由に標榜できることになっているが、専門医取得を標榜の条件にするかどうかなども含めて、今後の検討課題になると考えられる。

当院は北海道のほぼ中央に位置する旭川市にあり、日本最北端の医学部付属病院です。当科は2011年から着任している大田哲生教授をはじめ、2012年4月から新たにリハ科専門医2名と、さらに同年9月から医師1名が加わり計4名体制となりました。602床を有する当院において、当科は理学療法士8名、作業療法士3名、言語聴覚士1名の計12名からなるリハ部と協力して急性期リハを行っています。嚥下造影検査、筋電図検査、装具外来は当然のことながら、ボツリヌス療法も盛んに行っています。開設当初より、いくつかの診療科・病棟の定期カンファレンスに参加をしてリハ開始時期、方針、訓練経過などを話し合っています。これまで当院においてリハ科が存在していなかったということもあり、当面はリハの周知・理解を主目的としていました。話をしてみると他科は予想以上にリハを必要としていると実感しました。最近では他科からのリハ依頼数も少しずつ増加してきています。これからは他科や他部署と連携してさらに効率的で効果的なリハの提供を心がけていきます。さらに院内だけでなく北海道道北圏のリハ医療の中核として保健医療福祉圏のネットワークを通じてより質の高いリハ医療の提供を目指す方針です。一方でBMI (Brain Machine Interface) を用いた研究を始めていますが、より積極的に先端科学(脳の可塑性、神経路の再建・強化、コンピューター工学等)を通してリハ医学の可能性を追究していきます。教育では、プライマリケア、全身管理の習得とともに、廃用症候群の予防、障害の克服、早期社会復帰を目指すリハ医学の基本的知識は臨床医にはとても大切であり、そういった全人的医療の考えを持つ医



旭川医科大学病院リハビリテーション科

〒078-8510 北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
Tel: 0166-65-2111 Fax: 0166-68-2875
<http://www.asahikawa-med.ac.jp/hospital/rehab/index.html>

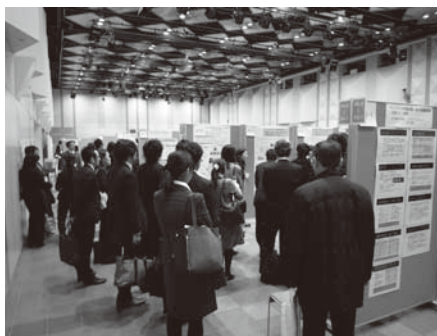
師・看護師、さらに社会的需要の高まっているリハ科専門医師の養成を当科の最重要項目の1つと考えています。また予防医学を念頭においた地域住民への啓発も教育活動の1つで地域リハ医療には不可欠であり意欲的に活動していきます。冬季は屋外での活動が制限されて運動量が不足気味になることは、地域特有のテーマかもしれません。数か月続く積雪と-20℃を下回ることもある寒さですが、熱いリハマインドを持って日々取り組んでいきます。(吉田 直樹)

REPORT

第4回日本ニューロリハビリテーション学会学術集会

第4回日本ニューロリハビリテーション学会学術集会が2013年2月17日に、川崎医科大学リハビリテーション医学教室の椿原彰夫教授を大会長に、岡山コンベンションセンターで開催されました。また前日の2月16日には第2回日韓ニューロリハビリテーション・カンファレンスも開催され、大変に国際色の豊かな学会でした。テーマは「日韓からアジアへの展開と連携」で、特別講演、シンポジウム、一般演題では口演発表とポスター発表が企画されました。

本学会は第1回の学術集会が2010年に開催された比較的新しい学会なのですが、今年は神経系の疾患に対するリハ医療と医学について、医師だけでなく理学療法士などの医師以外の方の参加や発表も多い学会でした。シンポジウムでは「ニューロリハビリテーションと医療連携」というテーマで医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、義肢装具士の立場からのシンポジストの発表があり、会場では職種の垣根を越えた大変活発な議論が行われていました。



神経系の疾患に対するリハは最近の進歩が特に目覚ましい分野であり、新しい知見や技術に関する講演や発表が多くありました。しかしまだまだエビデンスとしては十分でない部分もあり、リハ医学・医療の更なる発展のためには、基礎から臨床までの幅広い研究をもとにしたエビデンスの構築が必要であると感じました。

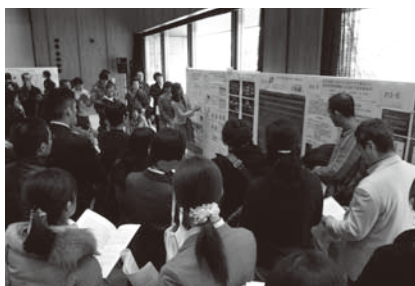
(岩砂病院・岩砂マタニティ
リハビリテーション科 森 憲司)



第2回がんのリハビリテーション懇話会

2013年1月12日、東京・笹川記念会館にて「第2回がんのリハビリテーション懇話会」が開催されました。本懇話会は、がんリハの普及と今後の臨床や研究の質の向上を目指した意見交換の場を提供する目的で企画されました。「厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）がんのリハビリテーションガイドライン作成のためのシステム構築に関する研究・研究班（主任研究者 辻哲也）」の活動の一環として、「がんのリハビリテーショングラウンドビジョン作成ワーキンググループ」が主催し、日本リハ医学会（設立50周年記念事業）、日本理学療法士協会、日本作業療法士協会、日本言語聴覚士協会、日本がん看護学会、日本リハビリテーション看護学会の後援をいただきました。幹事は亀田総合病院の宮越浩一先生と筆者が担当いたしました。

基調講演は辻哲也先生に「がんのリハビリテーションの現状と今後の動向～がんのリハビリテーションガイドラインおよびグラウンドデザイン作成の進捗状況報告とともに」でした。がんリハを取り巻く環境などについての解説のほか、近々完成予定のガイドラインやグラウンドデザインについての



熱気に溢れたポスター会場

説明をいただきました。

特別講演はアメリカでも有数のがんの専門病院であるテキサス州立大学MDアンダーソンがんセンター・リハビリテーション科准教授Dr. Yadavの「Cancer Rehabilitation in USA Past, Present, and Future」でした。がんリハ先進国であるアメリカの現状、MDアンダーソンがんセンターにおける取り組み、今後の課題などについて講演いただきました。

指定演題として「進行がん患者に対するリハビリテーション」をテーマに取り上げ、Dr. Yadavも交えて、活発な意見交換がなされました。一般演題は昨年を上回る31演題の応募がありました。発表者の職種は医師・看護師・理学療法士・作業療法士・



Dr. Yadav の招待講演

言語聴覚士・医療事務作業補助者と多岐にわたり学際的な研究発表の場にふさわしいものでした。

参加者は約300名と大変盛況であり、がんリハに対する熱意が伝わってきました。今後ともがんリハの啓発を継続し、さらに興味を持つ医療者が増えることを願います。

本懇話会は「日本がんリハビリテーション研究会」と名称を変更し、今年度以降も継続する予定です。次回の開催は2014年1月に関西での開催を予定しております。皆様のご参加をお待ちしております。

(静岡県立静岡がんセンター

リハビリテーション科 田沼 明)

第22回日本障害者スポーツ学会

2013年1月26日(土)～27日(日)に和歌山県立医科大学みらい医療推進センターげんき開発研究所副所長三井利仁学会長のもと第22回日本障害者スポーツ学会が行われました。会場は和歌山県立医科大学みらい医療推進センターが入っているフォルテワジマの4階イベントホールで行われました。日本障害者スポーツ学会初の和歌山開催というもあり、どれくらいの参加者があるか不安な状況でしたが、ロンドンパラリンピック直後の障害者スポーツ学会というのもあり、演題数は過去最多の41演題となり、2会場で実施されました。また、1日目の教育講演から100人以上の参加者が来場し、2日間あわせて合計133名の参加が見られました。

パラリンピックが終わり、海外では障害者スポーツが目覚ましい発展をしており、オリンピックに近い選手強化が必要になる中、教育講演では400mハードルで世界選手権で2度の銅メダル、オリンピックも出場した為末大氏が「私が見たパラリンピックの未来」のタイトルで、東海大学で多くの選手の指導を行った有賀誠司氏が「戦略的思考に基づく体力強化」の題でそれぞれ

講演を行いました。為末氏は、自分の体験のもとに色々な目線からパラリンピックを分析し、長く続けていると失敗が成功のもとになり、成功がまた失敗のもとになることもあると語ってくださいました。また、有賀氏には自らの指導経験のもとに選手やその時期、それぞれに合わせた指導法が必要であることをご講演いただきました。

2日目の特別講演では、和歌山から発祥した日本マスターズ陸上連盟の創立者で、現アジアマスターズ競技協会会長鴻池清司氏に「スポーツの重要性」というテーマで障害者、高齢者にとってスポーツが非常に重要なことを、和歌山から世界への企業と発展した株式会社島精機製作所代表取締役島正博氏には「限りなく前進～Ever Onward～」の題で向上心をもって前進してきた体験談を通して強く思っただけで競技に臨むことの重要性をご講演いただきました。

一般演題では、パラリンピックの帯同報告が、選手団医師、看護師、トレーナー、栄養士、そして報道から、そして競技別では、陸上のクラス分け、チームトレーナーなど様々な視点からの報告、発表が見られ、障害者スポーツ学会らしい発表内容で



あったと思われます。

そして、毎年前年の優秀な発表に贈られる緒方賞は日本大学の野村友樹子さんが「児童を対象としたスポーツ仕様短下肢装具のデザイン」で受賞しました。発表時は大学4年生で今年から社会人1年目という若手でこれからの活躍が期待されます。

また、1日目の夜には、会場であるフォルテワジマ5階にある主催の和歌山県立医大みらい医療推進センターの見学会と7階のレストラン街での懇親会なども盛況のもと行われました。

来年は、福岡県の聖マリア病院で井手睦氏のもと行われる予定です。

(和歌山県立医科大学

みらい医療推進センター 伊藤 倫之)

●腰椎－骨盤帯－股関節に関連した疾患を有する患者・アスリートの治療からトレーニングそして障害の予防までを具体的に解説した画期的な一冊！

骨盤帯

臨床の専門的スキルと
リサーチの統合

原著第4版

◆Diane Lee 著
石井美和子 (Physiolink) 監訳
今村安秀 (永生病院診療部整形外科部長) 監修

◀最新刊▶

◆B5判 446頁 定価10,500円(本体10,000円 税5%) ISBN978-4-263-21413-8

- 本書「原著第4版」では、著者が提唱する「統合システムモデル」というコンセプトとこれに沿って「臨床的専門的スキル」を向上させるために必要な知識や実践的なスキルがさらに加筆された。
- 図(3D模型や解剖図)と臨床写真(MRI, 超音波画像を含む)が豊富に示され、読むものによってより理解を深めるツールとなっている。



医歯薬出版株式会社 ☎113-8612 東京都文京区本駒込1-7-10 TEL03-5395-7610 FAX03-5395-7611 <http://www.ishiyaku.co.jp/>

 大日本住友製薬



長時間作用型 ARB

薬価基準収載

アバプロ[®]錠 50mg
100mg

一般名 イルベサルタン錠 AVAPRO[®]

処方せん医薬品 (注意—医師等の処方せんにより使用すること)

効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

製造販売元 (資料請求先)

大日本住友製薬株式会社

〒541-0045 大阪市中央区道修町 2-6-8

〈製品に関するお問い合わせ先〉

くすり情報センター

TEL 0120-034-389

受付時間 / 月～金 9:00～18:30 (祝・祭日を除く)

【医療情報サイト】 <https://ds-pharma.jp/>

2012.6作成



骨粗鬆症治療剤(活性型ビタミンD₃製剤)
劇薬 処方せん医薬品[※]

薬価基準収載

エディロール[®]カプセル 0.5μg
0.75μg

EDIROL[®]

エルデカルシトールカプセル

(注) 注意—医師等の処方せんにより使用すること

Ⓒ中外製薬株式会社登録商標

※「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等詳細については、添付文書をご参照ください。



製造販売元 (資料請求先)



中外製薬株式会社

〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1

Roche ロシュグループ



発売 (資料請求先)

大正富山医薬品株式会社

〒170-8635 東京都豊島区高田3-25-1

2013年1月作成



新発売

骨粗鬆症治療剤

劇薬・処方せん医薬品^(注) (注) 注意-医師等の処方せんにより使用すること



ベネット錠 75mg

日本薬局方 リセドロン酸ナトリウム錠

薬価基準・収載

- 効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等は、添付文書をご参照ください。

2013年2月作成



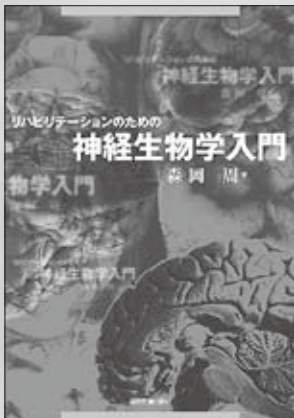
(資料請求先)

武田薬品工業株式会社

医薬営業本部

〒103-6668 東京都中央区日本橋二丁目12番10号

大好評 「リハビリテーションのための脳科学入門」 シリーズ 第3弾



リハビリテーションのための 神経生物学入門

森岡 周・著

「私」という生きもののこと、
ともに生きるこの世界のことを理解したい。

ロマンティック・リハビリテーションのための脳科学入門

最新刊

本書は著者による『リハビリテーションのための脳・神経科学入門』『リハビリテーションのための認知神経科学入門』に続く第3弾。脳科学を基盤とした現在のリハビリテーションの潮流にもっとも近接した最新脳科学のレビューを、臨床応用へのヒントを盛り込みながら書き上げた充実の内容です。姉妹編と同様、今回も豊富な図版を収録しました。

【目次】

- 私たちはどこから来たのか…人類の進化に伴う脳機能の変遷
- 「私」はどのようにして生まれるのか…脳の発達と成熟
- 「私」はどこにいるのか…自己意識と身体性の神経機構
- 私は世界に触れる…手の進化とその神経機構
- 私は世界を歩く…二足歩行を生み出す神経機構

- 私は知る…学習する人間
- 私の心は動かされる…情動の神経機構
- 私は心の中に世界をつくる
…概念・言語・イメージ・ワーキングメモリの神経機構
- 私は世界とともに生きる…社会的動物としての人間
- 私たちはどこへ行くのか…文化・芸術を生み出す人間

協同医書出版社
<http://www.kyodo-isho.co.jp>

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-21-10
tel. 03-3818-2361 / fax. 03-3818-2368

● A5・368頁・定価3,990円(本体3,800円+税)
送料340円 ISBN978-4-7639-1068-4

お知らせ

詳細は <http://www.jarm.or.jp/>
(開催日、会場、主催責任者、連絡先)

● **第50回学術集会**：6月13日(木) - 15日(土)、東京国際フォーラム(東京)、テーマ：こころと科学の調和ーリハ医学が築いてきたものー、会長：水間正澄(昭和大学医学部リハビリテーション医学講座)、幹事：川手信行、笠井史人、Tel 03-5216-5318、Fax 03-5216-5552、URL：http://www.congre.co.jp/jarm2013/

【専門医会】

第8回専門医会学術集会：11月9日(土) - 10日(日)、札幌市教育文化会館、代表世話人：石合純夫(札幌医科大学医学部リハビリテーション医学教室)

【地方会】

● **第27回北海道地方会等** (30単位)：4月20日(土)、札幌医科大学記念ホール、石合純夫(札幌医科大学医学部リハビリテーション医学講座)、Tel 011-611-2111 (内線3684)、Fax 011-618-5220

● **第31回中国・四国地方会等** (40単位)：7月7日(日)、島根県立産業交流会館(くまびきメッセ)、伊達伸也(東部島根医療福祉センター)、Tel 0852-36-8011、Fax 0852-36-8992、演題締切：5月13日

【専門医・認定臨床医生涯教育研修会】

● **近畿地方会** (30単位)：6月1日(土)、神戸大学医学部会館シスメックスホール、三浦靖史(神戸大学大学院保健学研究科)、Tel 078-796-4595、Fax 078-796-4595

● **中国・四国地方会** (20単位)：6月22日(土)、高新文化ホール(7階)、伊勢貞樹(倉敷中央病院リハビリテーション科)、Tel 086-422-0210、Fax 086-421-3424

● **近畿地方会** (30単位)：6月29日(土)、森之宮病院2階ウッドイホール、矢倉一(森之宮病院診療部リハビリテーション科)、Tel 06-6969-0111、Fax 06-6969-8001

◎ **病態別実践リハビリテーション医学研修会** (20単位) 150名。骨関節障害：7月13日(土)、品川フロントビル会議室、小林一成(東京慈恵会医科大学)、オンラインによる申込受付、申込に関する問合せ：日本リハ医学会事務局 担当：小林、Tel 03-5206-6011、E-mail：training@jarm.or.jp。神経系障害：10月12日開催予定、内部障害：2014年2月15日開催予定

【2013年度実習研修会】(20単位)
詳細はHP、学会誌をご覧ください。

◎ **小児のリハビリテーション実習研修会** (20 - 30名程度)：9月12 - 13日(2日間)、愛知県青い鳥医療福祉センター

◎ **義手・義足適合判定医師研修会アドバンス・コース** (12名)：1回目9月8 - 9日(2日間)、2回目10月21日、岡山市

◎ **臨床筋電図・電気診断学入門講習会** (40名)：9月28 - 29日(2日間)、慶應義塾大学医学部

◎ **職業リハビリテーション研修会** (20名)：10月6 - 7日(2日間)、岡山市・吉備中央町

◎ **脊損尿路管理研修会** (15名)：12月7 - 8日(2日間)、海南医療センター(和歌山県)

◎ **嚥下障害実習研修会** (28名)：1回目10月5 - 6日(2日間)、2回目2014年3月1 - 2日(2日間)、浜松市リハビリテーション病院、聖隷浜松病院・聖隷三方原病院

◎ **医療コミュニケーション実習研修会** (30名)：2014年2月1 - 2日(2日間)、銀座(東京)

◎ **福祉・地域リハビリテーション研修会** (20名)：2014年2月14 - 15日(2日間)、横浜市総合リハビリテーションセンター

◎ **実習研修「動作解析・運動学実習」** (20名)：2014年3月27 - 29日(3日間)、藤田保健衛生大学

【関連学会】(参加10単位)

第57回日本リウマチ学会総会・学術集会：4月18日(木) - 20日(土)、京都国際会館、中村孝志(国立病院機構京都医療センター)、Tel 03-3552-4180、Fax 03-3552-4178

第86回日本整形外科学会学術総会：5月23日(木) - 26日(日)、広島グリーンアリーナほか、越智光夫(広島大学大学院整形外科学)、Fax 082-223-0702

第54回日本神経学会学術大会：5月29日(水) - 6月1日(土)、東京国際フォーラム、水澤英洋(東京医科歯科大学大学院脳神経病態学分野)、Tel 03-5216-5318、Fax 03-5216-5552

第55回日本小児神経学会学術集会：5月30日(木) - 6月1日(土)、大分オアシスタワーホテルほか、泉達郎(大分大学医学部小児科学講座)、Tel 0977-27-0318、Fax 0977-26-7100

第31回日本骨代謝学会学術集会：5月30日(木)、神戸コンベンションセンターほか、吉川秀樹(大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学)、Tel 06-6221-5933、Fax 06-6221-5938

第55回日本老年医学会学術集会：6月4日(火) - 6日(木)、大阪国際会議場ほか、三木哲郎(愛媛大学大学院加齢制御内科学)、Tel 06-6229-2555、Fax 06-6229-2556

第40回日本脳性麻痺研究会：6月15日(土)、東京国際フォーラム、清水信三(群馬整肢療護園)、Tel 027-373-2277、Fax 027-373-2278

第19回日本心臓リハビリテーション学会学術集会：7月13日(土) - 14日(日)、仙台国際センターほか、上月正博(東北大学大学院医学系研究科障害科学専攻内部障害学分野)、Tel 022-722-1311、Fax 022-722-1178

●・◎認定臨床医受験資格要件：認定臨床医の認定に関する内規第2条2項2号に定める指定の教育研修会、◎：必須(1つ以上受講のこと)

代議員総会のお知らせ

日時：6月12日(水)
14時30分～16時30分
場所：東京国際フォーラム
ホール B7 - 1

会員への報告会のお知らせ

日時：6月13日(木)
8時40分～9時20分
場所：東京国際フォーラム
ホール C

■ **2013年度会費納入のお願い**：4月30日までお願いいたします。

■ **2012年度専門医・認定臨床医単位取得自己申請**：提出締切4月30日

■ **第4回リハ科専門医試験受験支援講座**：6月15日(土)、東京国際フォーラム第6会場(ホール D5)、詳細は学会誌50-4号、HP参照

■ **初期研修医等医師向けリハビリテーション研修会**：7月6日(土)、品川フロントビル会議室、対象：初期研修医および転向希望の医師、リハ科に興味のある医師、申込締切：7月1日(月)、詳細は学会誌50-4号、HP参照

■ **専門医資格更新について**：活動報告書提出締切4月30日必着、対象：認定期間3月31日までのリハ科専門医

■ **指導責任者資格更新について**：実績報告書提出締切4月30日必着、対象：認定期間3月31日までの指導責任者

■ **日本リハビリテーション・データベース協議会データマネジメント事業 2013年度参加施設募集中**：申込・問合せは事務局(E-mail：rehabdb-admin@umin.org)まで

広報委員会：安保雅博(担当理事)、阿部和夫(前委員長)、伊藤倫之、緒方敦子、数田俊成、佐々木信幸、長谷川千恵子、森憲司

問合せ・「会員の声」投稿先：「リハニュース」編集部 一般財団法人学会誌刊行センター内 〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16
Tel 03-3817-5821 Fax 03-3817-5830
E-mail：r-news@capj.or.jp
製作：一般財団法人学会誌刊行センター
印刷：三美印刷(株)
定価：1部100円(会員の購読料は会費に含まれる)

..... 広報委員会より

今回の特集では、原稿の締め切り日を誤って伝えてしまい、各地方会幹事の先生方、執筆者の先生方に多大なご迷惑をおかけしてしまいました。短い準備期間でご執筆いただきましたことを、改めてお詫びし、感謝申し上げます。日本リハ医学会総会が、各地で開催される際、地域色が感じられるのは参加する楽しみの一つではないでしょうか。この特集で会員の先生方が各地方会の特色と、拡がりを感じていただければ幸いです。(長谷川 千恵子)

次号58号より、リハニュースはPDFのみの発行となり、印刷物の送付はございません。なお、リハニュースは、バックナンバーも含め、下記URLに掲載しておりますので、引き続き、よろしくご厚意申し上げます。
http://www.jarm.or.jp/member/member_rihaneews/